昭和初期の旅行雑誌『旅行日本』と団体旅行

荒山正彦

はじめに

近代日本における旅行の歴史に関する研究は、ここ一〇年あまりの間に大きくすすんだように思われる。その要因は、資料収集の方法が劇的といってもいいほどに変わったことにある。旅行分野に限らず、近代期のさまざまな資料類は、デジタルアーカイブの充実と検索システムの整備によって、情報収集の利便性が向上した。旅行の歴史に直接関係する旅行案内書や旅行雑誌、リーフレットやエフェメラなどともよばれる一枚ものの資料類、そして印刷出版物に掲載された旅行に関する記事などは、インターネット上に情報が横溢している。

そもそも、旅行に関連する印刷出版物は、リアルタイムの情報に価値があるため、陳腐化しやすく、図書館や博物館のコレクションにもなりづらいものであった。したがって、旅行史の研究には、まず、図書館や博物館には所蔵されていない資料類の探索に、大きな労力が費やされていたのであった。かつては長い時間をかけて各地の古書店を渡り歩き、収集した資料類も、現在でははるかに少ない労力で収集することが可能になった。こうした資料へのアクセシビリティの向上に伴い、近代旅行史の研究が充実してきたのだと考えられる。本稿においては、東京ツーリスト倶

楽部によって発行された月刊雑誌『旅行日本』を資料として取り上げるが、『旅行日本』の全号収集も、資料検索が容易になったことによる。

ここ一〇年あまりの間に大きくすすんだ旅行史研究によって、あらたな課題も浮かびあがってきた。そのひとつが、旅行に関わる印刷出版物＝旅行印刷物の系譜を明らかにするという課題である。一枚ものの資料に比べると、その全体像が比較的把握しやすいと考えられる旅行案内書（ガイドブック）と旅行雑誌も、その歴史的な変遷はいまだ十分に明らかにはされていないのである。しかしながら筆者は、少なくとも明治期から昭和戦前期までのおよそ八〇年間における旅行案内書と旅行雑誌の系譜は、この先一〇年の間にはっきり描かれ得るものと考えている。

本稿では、こうした現時点における研究動向と問題意識、さらに将来の展望に立ち、雑誌『旅行日本』の概要を整理し、同誌に特徴的にみられる団体旅行に注目することで、近代日本の旅行史研究にあらたな一行を加えたいと考える。そこでまず第一章では、ここ一〇年あまりの旅行史研究を図書出版物から概観し、第二章以降においては、雑誌『旅行日本』と同誌発行の主体であった東京ツーリスト倶楽部、そして東京ツーリスト倶楽部ほかが主催した団体旅行を一覧することで、同時期における旅行の具体的な姿にも言及したい。

Ⅰ　近年における近代日本旅行史の研究動向

今からちょうど一〇年前の二〇一一年、近世の江戸期から昭和期までのおよそ四〇〇年間を見通した旅行年表が、一冊五〇〇ページの書物として出版された[1]。同書の「おわりに」にも記されているように、通史的な「旅と観光」の年表が出版された前例はなく、画期的なものであった。同書の刊行によって、四〇〇年間の旅行史を通覧できるばか

りではなく、経験的な研究を、通時的・共時的に位置づけることができるようになった。[2]

近代日本の旅行史研究において、比較的多くとりあげられているのが、鉄道と旅行との結びつきである。民俗学的な視点から旅行に注目する野村は、鉄道の普及と「身体感覚」を主題とし、各地の民謡や伝説をはじめとする民俗事象が、旅行に取り込まれていく様を描いた。[3] 同じく、近代以降の日本において国民的行事となった「寺社参詣」や「初詣」が、鉄道の開業と分かちがたく結びついていたことを、平山は歴史学的な視点から実証的に論じた。[4] また近代都市と鉄道をテーマとした鈴木も同様に、寺社参詣と鉄道敷設との因果関係を論じている。[5] 他にも、旅行とナショナリズム、旅行とモダニズムを主題として、従来の旅行史研究にあらたな視点が開かれた。[6]

鉄道と旅行の結びつきは、国内に留まるものではない。二〇世紀初頭に開業を迎えたシベリア鉄道は、日本近隣とロシアやヨーロッパを陸路で結びつけ、人とものの移動をつくりだした。和田によるシベリア鉄道紀行史は、戦前期にシベリア鉄道を利用した旅行者が数多くあったことをあらためて気づかせてくれた。[7] また和田は、日本とヨーロッパを海上で結びつけた「欧州航路」に注目した紀行史において、数多くのいわゆる文化人が、戦前期の欧州航路を用いて渡欧し、ヨーロッパを旅行し、その記録を残したことをまとめた。[8]

他方で、一九世紀末にうまれたグローブトロッター（世界漫遊家）による日本旅行の分析や、二〇世紀はじめに日本各地を旅行したオランダの文筆家の記録など、外国人の日本旅行を題材とした研究の蓄積もすすんだ。[9]

旅行案内書や旅行雑誌以上に、図書館のコレクションにはなりづらいリーフレットやエフェメラ類を数多く用いて、近代の旅行史を描く研究が、近年、いくつもみられた。日本郵船や大阪商船などが発行した航路案内を用い、松浦は海上旅行の研究をすすめ、[10] 橋爪は近世以来の名所・名勝が数多く集まる京都の近代観光と、一方で近代から観光地となった瀬戸内海をとりあげた研究をすすめた。[11] そして谷沢は、近畿地方、中部地方以外の日本各地における昭和

初期の旅行をとりあげた。[12]

以上のように、近年、日本近代の旅行の歴史に関する研究は蓄積されてきた。[13] ところで筆者は、こうした経験的な研究は今後も継続・蓄積されねばならないと考えるが、同時に、研究の資料となる旅行印刷物の系譜も明らかにされねばならないと考える。たとえば旅行案内書（旅行ガイドブック）は、観光の研究においてしばしば資料として用いられてきたにもかかわらず、日本における旅行案内書の系譜は十分には描かれていない。旅行史研究をすすめるためには、その資料となる旅行印刷物の整理が行われねばならない。[14] そこで第Ⅱ章以降では、旅行印刷物のひとつである旅行雑誌『旅行日本』をとりあげる。[15]

Ⅱ　東京ツーリスト倶楽部と『旅行日本』

（一）雑誌『旅行日本』の概要

『旅行日本』は、ジャパン・ツーリスト・ビューロー内につくられた旅行のクラブ組織である「東京ツーリスト倶楽部」から発行された。明治四五（一九一二）年に設立されたジャパン・ツーリスト・ビューローでは、昭和七（一九三二）年に創立二〇周年を迎え、この年に東京ツーリスト倶楽部が創設され、クラブの会員向けに雑誌『旅行日本』が創刊されたのであった。ジャパン・ツーリスト・ビューローは外客の誘致と斡旋を目的として設立された機関であったが、東京ツーリスト倶楽部は趣味としての旅行を普及させるために、団体旅行の企画、展覧会・映画会・講演会の開催などを活動の目的とした。

ジャパン・ツーリスト・ビューローからは、創設翌年の大正二（一九一三）年から月刊の機関雑誌『ツーリスト』

が発行されていた。雑誌『ツーリスト』は和文欄に加えて英文欄を持ち、日本を含めた世界各地の旅行地の紹介や、旅行界への指針とその動向などを発信する媒体であった。これに対して雑誌『旅行日本』は、日本国内と朝鮮・満洲・台湾などの案内を軸とした旅行情報誌であった。

『旅行日本』は創刊からおよそ一年で発行部数は一万部を超え、横浜、大阪、満洲の大連、朝鮮の京城と平壌、台湾の台北にもツーリスト倶楽部が設けられ、より大きな組織となった。しかしながら『旅行日本』は発行わずか三年間、全三〇号をもってやや唐突に終刊を迎えた。昭和九（一九三四）年に、東京ツーリスト倶楽部は、旅行雑誌『旅』を発行していた日本旅行協会と合併し、『旅行日本』も『旅』へと吸収合併されることとなったからである。

このように『旅行日本』は、発行期間三年、全三〇号の雑誌にすぎないが、そこには昭和初期、一九三〇年代なかばにおける旅行の様子が鮮やかに描き残されている。初詣、スキー、観梅、桜の花見、新緑、夏山登山、海水浴、キャンプ、紅葉狩りといった季節ごとの旅行記事や、募集型の団体旅行の広告と記録、巻頭のグラビアページ、毎号変わる雑誌の表紙デザイン、そして各地の旅館の広告など、同時期の旅行文化史をたどるうえで、とても興味深い内容に富んでいる。

（二）旅行団体と『旅行日本』の創刊

日本における旅行団体の歴史は、近代以前にさかのぼる。伊勢参宮参詣の伊勢講や、富士詣（富士登山）の富士講などは、近世においてすでに組織されており、そうした団体旅行は明治期にも継承された。他方で明治期には、信仰を軸とした団体旅行とは異なる旅行と登山、自然観察などを目的とした団体旅行が各地で組織されたようである。

たとえば現在の大阪市では、明治三九（一九〇六）年に「大阪探勝わらじ会」が創設され、関西近郊をはじめとす

る日本各地への団体旅行が行われ、わらじ会旅行集『道づれ』が発行された。また大正三（一九一四）年二月には、現在の神戸市御影に「日本アルカウ会」が創設され、神戸市の六甲山をはじめとする近畿各地での登山を目的とした団体の旅行会が実施された。時代はやや遡るが、明治三三（一九〇〇）年には東京府第一中学校において昆虫や植物の観察と記録などを目的とした会がつくられ、旅行の記録などが掲載された『博物の友』が発行された。[16]

大正一〇（一九二一）年四月、現在の東京都荒川区日暮里で「東京アルカウ会」が誕生した。この東京アルカウ会では、日本アルカウ会と同様に定期的な旅行会が行われた。設立翌年の大正一一（一九二二）年には、講演会や展覧会、出版などを目的とした「日本旅行文化会」が設けられ、従来の会報誌を継承して月刊の会報誌『旅』が発行されることとなった。[17] そして日本旅行文化会は、鉄道省、南満洲鉄道、日本郵船、大阪商船、ならびにジャパン・ツーリスト・ビューローが加盟する「日本旅行文化協会」へと発展的に改組され、同人誌的な会報誌『旅』は大正一二（一九二三）年に終刊となり、翌年、装いを新たにした雑誌『旅』が創刊された。この時点でジャパン・ツーリスト・ビューローでは、和文欄と英文欄を持つ月刊の機関雑誌『ツーリスト』と、旅行クラブの系譜を継承する月刊の旅行雑誌『旅』の二雑誌を持つこととなった。[18] なお日本旅行文化協会は、大正一（一九二六）年に「日本旅行協会」へと再び名称を変更した。

昭和七（一九三二）年三月二〇日、ジャパン・ツーリスト・ビューローは創立二〇周年の記念日を迎えた。『旅行日本』創刊号（同年五月一〇日発行）には、「創立廿周年記念事業の一端といたしまして、ここに東京ツーリスト倶楽部の開設を見るに至りました」と報じられ、東京ツーリスト倶楽部へは、一年間一円二〇銭の会費を支払えば誰でも入会ができること、会員の特典として機関雑誌『旅行日本』が配布されることが記された。ここにジャパン・ツーリスト・ビューローが関わる三種類目の雑誌『旅行日本』が誕生したのであった。なお、昭和七年の一円二〇銭は、

現在の貨幣価値に換算するとおよそ二五〇〇～三〇〇〇円であり、雑誌『旅行日本』を年間で受け取れるという会員特典を考えると、会費はかなり安価に感じられる。また、雑誌本体には一部十五銭（現在のおよそ三〇〇円）の表記もみられる。

このように雑誌『旅行日本』は、明治期以降各地に設立された旅行団体のひとつである東京ツーリスト倶楽部の機関誌としてスタートした。東京ツーリスト倶楽部は、数ある旅行団体のひとつにすぎないが、すでに雑誌『ツーリスト』を月刊で発行し続け、さらに創立二〇周年を迎え大きな組織へと成長したジャパン・ツーリスト・ビューローがクラブ運営の主体となったことで、創設時から月刊雑誌を発行できるだけの知識や経験の蓄積があったのだと考えられる。

（三）『旅行日本』とその終刊

東京ツーリスト倶楽部が創設されて間もなく横浜ツーリスト倶楽部が設けられ、後に大阪、大連、京城、平壌、台北にもそれぞれツーリスト倶楽部が設置され、これら七つを総称して「ツーリスト倶楽部」の名称が用いられた。クラブ会員は創設後すぐに一〇〇〇名を越え、創設およそ一年後の『ツーリスト』第二巻第三号（昭和八年三月一〇日発行）では、会員が一万人に近づいているとされた。そして創立一周年記念号となる第二巻第五号（同年五月一〇日発行）では、会員八千人、『旅行日本』発行部数一万部が報じられ、「就きましては更に一段の努力と精進を続けて所期の理想たる「会員十万人」に邁進致したいと存じます」と、さらなる組織の拡大が掲げられることとなった。

『旅行日本』は毎月一〇日を発行日とし、コンスタントに発行され続けた。雑誌の判型は四六倍版で、巻頭の写真ページと本文二〇～三〇ページ前後からなり、表紙デザインは毎号異なっている。雑誌記事は、日本国内や満洲、朝

鮮、台湾の旅行地・遊覧地の紹介が主で、ツーリスト倶楽部が主催した団体旅行の記録、さまざまな団体旅行の募集、旅館の紹介や広告、そして毎号ではないが特集が掲載されている。

前述のように、『旅行日本』は創刊から三年後の昭和九（一九三四）年に終刊を迎える。第一巻が八号、第二巻が一二号、そして第三巻が一〇号の全三〇号を発行し役割を終えた。三〇号の雑誌を通覧すると、この終刊がとても唐突であることに気づく。『旅行日本』誌上で終刊が伝えられたのは最終号の第三巻第一〇号（昭和九年一〇月一〇日発行）においてである。「ツーリスト倶楽部会員の皆様へ」と題された一文には、前述の日本旅行協会と、ツーリスト倶楽部の上位組織であるジャパン・ツーリスト・ビューローが合併し、ツーリスト倶楽部はあらたな組織名「日本旅行倶楽部」へと改称すること、それに伴い『旅行日本』は廃刊となり、日本旅行協会によって発行されてきた雑誌『旅』を、日本旅行倶楽部の雑誌『旅』とすることが記されている。さらにたいへんややこしい話ではあるが、日本旅行協会の名称は、昭和九年以降、ジャパン・ツーリスト・ビューローのもうひとつの機関名称として、主に印刷出版物において用いられることとなる。

この組織の合併と雑誌の統合については、ジャパン・ツーリスト・ビューローの後継機関である日本交通公社によって編纂された『日本交通公社七十年史』[19]にも記載されている。すなわち、ジャパン・ツーリスト・ビューローは、『旅』と『旅行日本』という類似の旅行雑誌を発行する主体となっており、その統合を図ることが内外から働きかけられた。その結果、『旅行日本』は終刊を迎えることとなったが、両雑誌の統合によって、雑誌『旅』の判型は従来の菊判から『旅行日本』の判型である四六倍版となった。また、和文欄と英文欄をあわせもった『ツーリスト』も、昭和一一（一九三六）年六月を最後に和文欄が廃止され、翌七月からは英文欄のみの雑誌 *TOURIST* となった。その結果、ジャパン・ツーリスト・ビューローが発行に関わった三種類の雑誌は、『旅』のみが残り、戦後にも継承され

ることになった。なお、外地に目を向けると、一九三四（昭和九）年にはジャパン・ツーリスト・ビューロー大連支部から雑誌『旅行満洲』が創刊され、一九三九（昭和一四）年には日本旅行協会（ジャパン・ツーリスト・ビューロー）朝鮮支部から雑誌『観光朝鮮』が創刊された。[20]

Ⅲ　『旅行日本』にみる団体旅行

（一）旅行記事の概要

雑誌『旅行日本』は刊行期間が三年に満たない雑誌であるが、全三〇号の全体は一覧しやすく、発行時の昭和七年から九年における旅行の状況は把握しやすい。この同じ時期には、戦前期の旅行案内書の集大成ともいえる『日本案内記』全八巻（鉄道省）が昭和四（一九二九）年から一一（一九三六）年にかけて年一冊ずつ刊行され、旅行は社会に深く浸透していた。『旅行日本』の各号には、特集号として明記されてはいないが、それぞれの巻ごとに特定のテーマや地域にスポットがあてられている。

第一巻第一号は五月一〇日に発行されたこともあり、新緑旅行の記事が多くみられ、全国各地の新緑の探勝にふさわしい旅行地が具体的に紹介されている。巻号ごとに新年から順にみると、初詣、スキー、観梅、桜の花見、新緑、夏山登山、海水浴、キャンプ、紅葉狩りという旅行のテーマを見つけだすことができる。また第二巻（昭和八年）以降には、有坂與太郎を中心とした郷土玩具研究会の活動が多く報じられるようになり、第二巻第四号には「郷土玩具番附」という見立て番付が雑誌の付録とされ、各地の郷土玩具の収集が旅行の目的となっていることをうかがわせる。

また地域に注目すると、「富士五湖」（第一巻第二号）、「伊勢紀州大和」（第一巻第四号）、「東北」（第一巻第五号）、「四国」（第一巻第六号）、「伊豆」（第一巻第八号）、「天の橋立・城崎」（第二巻第三号）、「九州」（第二巻第五号）、「屈斜路湖・摩周湖・阿寒湖」（第二巻第八号）などの国内各地や、朝鮮や満洲への旅行をまとめた「東亜周遊」（第二巻第二号と第三巻第五号）、「台湾」（第二巻第四号）が列記される。

こうしたテーマ別、地域別の旅行案内は、同時代の旅行案内書にも記載がみられるが、ツーリスト倶楽部という旅行団体の雑誌としての特徴は、団体旅行の広告や記録にあると考えられる。

（二）『旅行日本』に掲載された団体旅行の広告宣伝

『旅行日本』の全三〇号に掲載された団体旅行募集の広告は一〇〇件を越える。このうち催行日や料金などが明記され、旅行が実施されたと考えられるものは八四件であった。後掲の表1は、『旅行日本』に掲載された団体旅行の広告宣伝計八四件を、掲載巻号順に一覧したものである。団体旅行の広告は、雑誌の扉にまとめて掲載れる場合が多くみられるが、本文中の囲み記事として挿入されている場合もある。広告には旅行団体の名称と旅行期間、料金、主催者などが記されており、その記載に準じて表1を作成している[21]。詳細な旅程が記されたものもあるがここでは省略した。

全三〇号の『旅行日本』ほぼすべての号に団体旅行の広告宣伝は掲載されている。そして主催者の多くは『旅行日本』の発行主体である東京ツーリスト倶楽部ないしはツーリスト倶楽部、そしてジャパン・ツーリスト・ビューローである。表1からは、団体旅行の旅程には東京近郊への日帰り旅行から、北海道や九州を周遊するもの、満洲や台湾を周遊するものまで、さまざまに催行されていたことがわかる。ここでは特徴的な団体旅行を列記しておきたい。

表 1　『旅行日本』に掲載された団体旅行の広告宣伝

巻(号)	団体旅行の名称	期間	料金	主催と後援
1(2)	瀬戸内海周遊	7 月 9 日東京駅〜7 月 14 日大阪天保山	2 等 50 円、3 等 35 円	大阪商船 ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	北海道へ船の旅	7 月 2 日横浜駅〜7 月 9 日横浜駅	1 等 98 円、2 等 73 円 3 等 41 円 50 銭	東京日日新聞社 ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	初夏の三ツ峠へ	6 月 19 日新宿駅〜　日帰り	大人 4 円 20 銭 小児 2 円 50 銭	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
1(3)	日本北端の奇観　海豹島へ	8 月 3 日小樽港〜8 月 8 日小樽港	1 等 44 円、2 等 33 円、 3 等 22 円、学生 18 円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 北日本汽船
	自動車旅行　三浦半島一周	7、8 月中毎日曜日　東京駅発着　日帰り	3 円 50 銭	東京ツーリスト倶楽部
	自動車旅行　犬吠岬から鹿島・香取へ	7 月 23 日ほか計 5 回　土曜日東京発　日曜日東京着	12 円 50 銭	東京ツーリスト倶楽部
	自動車旅行　逗子方面	7 月 16 日（土）、23 日（土）東京駅発着　日帰り	1 円 90 銭	東京ツーリスト倶楽部
	奥利根渓谷探勝と赤沢林道越え	7 月 16 日（土）上野駅〜17 日（日）上野駅	8 円 50 銭	東京ツーリスト倶楽部・日本温泉協会
	奥日光白根山探勝	8 月 6 日（土）上野駅〜7 日（日）上野駅	11 円 50 銭	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部・横浜ツーリスト倶楽部
1(4)	自動車旅行　逗子方面	8 月中毎日（日曜、休日を除く）	1 円 90 銭	東京遊覧ピクニック会
	自動車旅行　三浦半島一周	8 月中毎日曜日　東京駅発着	3 円 50 銭	東京遊覧ピクニック会
	自動車旅行　犬吠埼から鹿島・香取へ	8 月 6 日ほか計 4 回の土曜日東京発　日曜日東京着	12 円 50 銭	東京遊覧ピクニック会
	満洲国事情並に戦蹟視察団	9 月 5 日下関〜21 日下関　17 日間	2 等 202 円	下関鮮満案内所 大阪朝日新聞社門司支店
1(5)	小豆島八十八か所めぐり	10 月 18 日から 10 日間	3 等 69 円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	旧箱根街道と十国峠ドライブ	9 月 18 日　日帰り	大人 5 円 20 銭 小児 3 円	東京ツーリスト倶楽部
1(6)	台湾へ	11 月 6 日東京駅〜25 日神戸　20 日間	235 円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	黒部渓谷探勝	10 月 15 日夜上野駅〜17 日上野駅	15 円 50 銭	内務省内国立公園協会 ジャパン・ツーリスト・ビューロー
1(7)	鉄道の団体旅行　四国・九州巡り	11 月 6 日東京〜　14 日間	84 円 37 銭	ツーリスト倶楽部

	鉄道の団体旅行　奥伊豆めぐり	11 月 12 日～	15 円 41 銭	ツーリスト倶楽部
2(1)	スキーを始めて穿く会	1 月 17 日上野駅～20 日上野駅	11 円	東京・横浜ツーリスト倶楽部
	新春の催し　蒐印と初詣で	1 月 11 日　日帰り	2 円 50 銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部
	大東京遊覧	1 月 15 日　日帰り	2 円 50 銭	東京ツーリスト倶楽部・遊覧ピクニック会
	月掛旅行　東海道中仙道自動車の旅	5 月 10 日東京駅～14 日大阪駅 5 月 15 日大阪駅～19 日東京駅	50 円 （月に 10 円を 5 か月）	東京・大阪ツーリスト倶楽部
2(2)	三原山登山	2 月 10 日霊岸島～11 日、2 月 18 日霊岸島～19 日	3 円 50 銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部
	坂東三十三番観音霊場巡り	2 月 26 日東京～	3 円	東京・横浜ツーリスト倶楽部
2(3)	海の底を覗く会　駿河湾の海底見物	3 月 26 日　日帰り	6 円 50 銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部
	坂東三十三番観音霊場巡り	3 月 19 日　日帰り	3 円 50 銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部
	神宮詣と嵐山桜の旅	4 月 1 日東京駅～6 日東京駅	31 円 25 銭	日本探勝協会 ジャパン・ツーリスト・ビューロー
2(4)	伊豆の温泉場　隅から隅まで	4 月 10 日東京駅～13 日	22 円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京・横浜ツーリスト倶楽部
	低山趣味　春の山歩き	4 月 23 日　日帰り		東京ツーリスト倶楽部
	坂東三十三番観音霊場巡り	4 月 29 日～30 日	11 円 50 銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部
2(6)	甘利山へ	6 月 24 日飯田町駅～25 日新宿駅	5 円 50 銭	東京ツーリスト倶楽部
	観音霊場巡り	6 月 18 日　日帰り	6 円 30 銭	東京ツーリスト倶楽部
2(7)	椰子の葉茂る南の国 憧れの島　小笠原へ	7 月 8 日東京芝浦～15 日	1 等 57 円 2 等 38 円～45 円 3 等 25 円、学生 22 円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 近海郵船、時事新報社
	夏は船に乗って （別府、島原、雲仙ほか）	7 月 21 日横浜港～28 日神戸	大人 160 円 小児 120 円	日本郵船・大阪商船 ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	相馬の野馬追ひ見物	7 月 11 日上野駅～13 日上野駅	約 11 円	東京ツーリスト倶楽部
	奥日光尾瀬沼探勝	7 月 25 日上野駅～28 日上野駅		東京ツーリスト倶楽部
	北海道の温泉と湖水めぐり	8 月初旬　2 週間		東京ツーリスト倶楽部
2(8)	温泉と海水浴 伊豆今井浜のキャンプ場へ	8 月 10 日～12 日 8 月 15 日～17 日	9 円 50 銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部

2(9)	天竜川下りと館山寺の観月	10月2日～5日	36円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
	金剛山探勝	10月6日　2週間		ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
2(10)	三ツ峠の秋を探る	10月15日　日帰り	3円60銭	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
	高源の秋を探ねて　碓氷峠越え	10月28日～29日	3円50銭	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
	紅葉の大菩薩峠探勝	10月21日～22日	6円50銭	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
	紅葉の秋を探ねて　黒部渓谷へ	10月23日～25日	15円50銭	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
	富士山麓一周の旅	10月23日～24日	15円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
	伊豆の温泉　隅から隅まで	10月24日～27日	31円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部、東海自動車
2(12)	厄落しとお礼詣　10か寺の蒐印	12月17日　10か寺の蒐印　日帰り	3円30銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部
3(1)	スキーを始めて穿く会	1月11日～14日	11円	東京・横浜ツーリスト倶楽部
	初詣でと蒐印　15社寺	1月15日　日帰り	2円70銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部
	大東京遊覧	1月14日東京駅集合解散　日帰り	3円	東京・横浜ツーリスト倶楽部
3(2)	スキーを始めて穿く会	2月15日～18日	11円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー ツーリスト倶楽部、日本温泉倶楽部
	早春の伊豆温泉　隅から隅まで	2月18日～21日	30円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー ツーリスト倶楽部
	雪の北陸温泉巡り	2月22日東京～27日上野	44円50銭	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京・横浜ツーリスト倶楽部
3(3)	坂東三十三番観音巡り	3月18日　日帰り	3円50銭	東京ツーリスト倶楽部
	郊外に緑を追う　日帰り自動車の旅	3月25日　日帰り	3円20銭	東京ツーリスト倶楽部
	大洗から村松虚空蔵へ	3月31日～4月1日	8円50銭	東京ツーリスト倶楽部

3(4)	坂東三十三番観音巡り	4月15日　日帰り	3円70銭	東京ツーリスト倶楽部
	鮮満視察団	5月6日東京駅～26日	270円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	北海道探勝団体	6月5日上野駅～11日	84円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
3(5)	オール九州探勝	5月16日東京駅～28日大阪	110円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
	坂東三十三番観音巡り	5月12日～13日	12円80銭	東京ツーリスト倶楽部
3(6)	坂東三十三番観音巡り	6月9日～10日	14円50銭	東京ツーリスト倶楽部
	新緑と躑躅を追ふて	6月10日　日帰り	5円50銭	東京・横浜ツーリスト倶楽部
3(7)	海豹島　樺太　北海道探勝	7月5日上野発～27日登別温泉	125円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー 東京ツーリスト倶楽部
	富士山一周伊豆長岡温泉	7月14日から8月、9月の毎土曜日　1泊2日	大人14円、小人10円	遊覧ピクニック会、東京乗合自動車 東京ツーリスト倶楽部
	逗子海水浴	7月15日から8月、9月の毎日曜日　日帰り	1円60銭	遊覧ピクニック会、東京乗合自動車 東京ツーリスト倶楽部
	房総半島一周	8月4日、18日の土曜日　1泊2日	大人12円、小人9円	遊覧ピクニック会、東京乗合自動車 東京ツーリスト倶楽部
	三浦半島一周	7月15日から8月、9月の毎日曜日　日帰り	3円50銭	遊覧ピクニック会、東京乗合自動車 東京ツーリスト倶楽部
	日本アルプスと天竜川下り	8月10日大阪～12日	27円	京阪電車京浜探遊会
3(8)	十和田湖探勝と姫鱒釣り	8月23日～26日	28円50銭	東京ツーリスト倶楽部
	上高地探勝	8月17日～19日	14円50銭	東京ツーリスト倶楽部
3(9)	南北支那視察団	10月4日～27日	495円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	金剛山の紅葉を訪ねて	10月5日～18日	175円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	坂東三十三番観音巡り	9月16日　日帰り	4円30銭	東京ツーリスト倶楽部
	瀬戸内海四国周遊の旅	10月14日～20日	55円	大阪商船、ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	南紀州周遊	10月中旬	50円	大阪商船、ジャパン・ツーリスト・ビューロー

	沖縄周遊	10月12日～25日	110円	大阪商船、ジャパン・ツーリスト・ビューロー
3(10)	常夏の国　異国的な台湾へ	11月4日～24日	265円	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	紅葉の上高地探勝団	10月12日～14日	19円50銭	国立公園協会、ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	観音巡り	10月25日～26日	15円50銭	東京ツーリスト倶楽部
	沖縄九州周遊団	10月12日～25日	110円	大阪商船、ジャパン・ツーリスト・ビューロー
	観音巡り	11月6日～7日	14円50銭	東京ツーリスト倶楽部
	観音巡り	11月15日　日帰り	5円80銭	東京ツーリスト倶楽部

第Ⅱ章で述べたように、日本における団体旅行の歴史は近世以前からあり、その目的の多くは寺社参詣であった。表1にみられる「小豆島八十八か所めぐり」（一巻五号）、「坂東三十三番観音霊場巡り」（二巻二号ほか）、東京近郊の「観音霊場巡り」（二巻六号）などは、寺社参詣の団体旅行が継承されたことを示している。一巻三号、一巻四号、一巻五号の「自動車旅行　三浦半島一周」、「自動車旅行　逗子方面」、「旧箱根街道と十国峠ドライブ」は、東京乗合自動車の「青バス」のような一六人から二〇人乗りの展望車、あるいは後述するような三五人乗りの当時としては最も大型の自動車（バス）を利用した旅行であったと考えられる。(22)

こうした寺社参詣や自動車旅行への参加料金を確認しておきたい。『旅行日本』が刊行されていた昭和初期と現在との物価比は、およそ一対二〇〇〇～二五〇〇であったと考えられる。「自動車旅行　三浦半島一周」（一巻三号）は三円五〇銭なので、現在の価格に換算するとおよそ七～九〇〇〇円となり、「自動車旅行　逗子方面」（一巻三号）は四～五〇〇〇円、同様に日帰りの「坂東三十三番観音霊場巡り」（二巻二号）は六～八〇〇〇円である。また旅行日程が一〇日間におよぶ「小豆島八十八か所めぐり」（一巻五号）は、三等料金六九円なので、現在の価格に換算するとおよそ一四～一七万円となる。すなわちこの時代の団体旅行は、現在の団体旅行の参加費用とほぼ変わらない旅行

金設定がなされていたことがわかる。

二巻一号には「月掛旅行　東海道中仙道自動車の旅」の広告宣伝が掲載されている。月掛旅行は、この時期各地で行われており、文字通り旅行のための積立を毎月行い、掛け金の合計を使って旅行を行うものである。「月掛旅行東海道中仙道自動車の旅」は、毎月一〇円を五か月間、主催者に払い込み、その合計額五〇円を参加費用とした。なおこの自動車旅行は、定員三五名の「高級展望車式新造車」で五日間をかけて、東京から東海道と中仙道を通り大阪へ至る「東京参加」と、同じ旅程を大阪から東京へ向かう「大阪参加」があった。

東京近郊へのハイキング旅行や登山の団体旅行も確認できる。「初夏の三ツ峠へ」（一巻二号）、「三原山登山」（二巻二号）、「低山趣味　春の山歩き」（二巻四号）、「奥日光尾瀬沼探勝」（二巻七号）などである。また、「スキーを始めて穿く会」（二巻一号ほか）、東京市内を遊覧する「大東京遊覧」（二巻一号ほか）なども、同時代の団体旅行例として列記しておく必要があろう。

こうした団体旅行がみられる一方で、北海道や九州、満洲、台湾、朝鮮への団体旅行も少なくない。一巻二号には「北海道への船の旅」（八日間）、二巻七号には「椰子の葉茂る南の国　憧れの島　小笠原」（八日間）と「北海道の温泉と湖水めぐり」（一四日間）、三巻五号には「オール九州探勝」（一三日間）、三巻九号には「沖縄周遊」（一四日間）がみられる。

このうちたとえば「オール九州探勝」の旅程は、五月一六日午前一〇時に東京駅を出発し、翌一七日に下関から門司を経て博多に着き、博多市内を自動車で遊覧したのち博多に宿泊、翌日からは、唐津、武雄温泉、長崎、雲仙、島原、熊本、鹿児島、霧島神宮、高千穂、大分、別府へと九州を反時計回りに周遊し、大分から瀬戸内海航路で五月二八日午後に大阪へ帰着するというものである。募集人員は三〇名、会費は移動や宿泊、食事などの一切を含めて一人

一一〇円であった。現在の価格に換算するとおよそ二二～二八万円である。本稿において旅程の分析は行わないが、樺太を含めた北海道旅行、小笠原旅行、沖縄旅行の中身と内容はとても興味深い。

本章の最後に、満洲、台湾、朝鮮への団体旅行にも言及しておきたい。満洲、台湾、朝鮮への団体旅行には、「満洲国事情並に戦績視察団」（一巻四号）、「台湾へ」（一巻六号）、「金剛山探勝」（二巻九号）、「鮮満視察団」（三巻四号）、「常夏の国　異国的な台湾へ」（三巻一〇号）などがみられる。

これらのうち「常夏の国　異国的な台湾へ」の詳細をみておきたい。この団体旅行は『旅行日本』の最終号に掲載されており、雑誌の発行主体であるジャパン・ツーリスト・ビューローの主催旅行である。一一月四日に東京を出発し、航路で台湾へ向かい、台北から台中、嘉義、阿里山、台湾最南端のガランピ灯台、高雄、タロコなどを団体で周遊し同月二七日に神戸港へ帰着する二四日間の旅程である。募集人員は三〇名、参加費は一人二六五円と現在の価格に換算すると五～七〇万円の団体旅行である。見学地ひとつひとつの分析も求められるが、ここでは宣伝広告のことばに注目しておきたい。広告文は次の通りである。[23]

「毎年好評を博しつつあるビューロー主催の台湾視察団！本年も左の日程に依り三十名の模範団体を募集する事になりました（中略）。十一月の台湾は内地では恰も五月、観光には最も好い時季とされています。そこには豊醇な味を持つ熱帯果物の色々、涯しなく続く甘蔗畑、水牛の群、さては本島最南端ガランピ灯台（中略）、台南に遊びては社寺と旧蹟に昔を偲び、鉄路登高八千尺阿里山の山峡深く分け入って仰ぐ霊峰新高の荘厳（後略）」

この広告宣伝からは、旅行先としての台湾は、九州周遊や北海道周遊の延長線上にある身近な場所であり、他方では内地にはみられない、さまざまな魅力に満ちた旅行目的地として位置づけられていたことが読み取れる。またこの時期すでに定期航路を持ち『航路案内』も刊行されていた南北アメリカやハワイ、南洋群島、オーストラリア、そし

てヨーロッパへの団体旅行は、少なくとも『旅行日本』には登場しない。そのいみで、表1に一覧された団体旅行の目的地は、東京ツーリスト倶楽部会員がイメージできる旅行空間を表現していると捉えることができるであろう。

おわりに

本稿では、東京ツーリスト倶楽部の雑誌『旅行日本』をとりあげ、近代日本の旅行史にあらたな知見を加えた。『旅行日本』には、広告宣伝された団体旅行の実施記録や参加者の旅行記も、一部ではあるが掲載されている。旅行の予告だけではなく、旅行の記録を雑誌記事から分析することも今後の研究課題になるであろう。

注

（1）旅の文化研究所編（二〇一一）『旅と観光の年表』河出書房新社、五〇六頁。

（2）二〇一九年には、主として現代の観光事象に関する体系的な事典、白坂蕃ほか編著（二〇一九）『観光の事典』朝倉書店、四五〇頁も出版された。同書には、近代の旅行史に関する記述として「日本観光史」が項目としてたてられているが、あらたな知見はみられない。

（3）野村典彦（二〇一一）『鉄道と旅する身体の近代―民謡・伝説からディスカバー・ジャパンへ―』青弓社、五六二頁。

（4）平山昇（二〇一二）『鉄道が変えた社寺参詣―初詣は鉄道とともに生まれ育った―』交通新聞社、二四四頁、平山昇（二〇一五）『初詣の社会史―鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム―』東京大学出版会、三一三頁。

（5）鈴木勇一郎（二〇一九）『電鉄は聖地をめざす―都市と鉄道の日本近代史―』講談社、二三三頁。

（6）旅行とナショナリズムに関しては、紀元二六〇〇年に注目したケネス・J・ルオフ著、木村剛久訳（二〇一〇）『紀元二千六百年―消費と観光のナショナリズム―』朝日新聞出版、三〇三頁（原著出版は二〇一〇年）があり、旅行に近代性（モダニズム）を読み解こうとする赤井正二（二〇一六）『旅行のモダニズム―大正昭和前期の社会文化変動―』

ナカニシヤ出版、三三四頁がみられる。

(7) 和田博文（二〇一三）『シベリア鉄道紀行史―アジアとヨーロッパを結ぶ旅―』筑摩書房、二七五頁。

(8) 和田博文（二〇一六）『海の上の世界地図―欧州航路紀行史―』岩波書店、二八一頁。

(9) 中野明（二〇一三）『グローブトロッター―世界漫遊家が歩いた明治ニッポン―』朝日新聞出版、三三一頁、ルイ・クペールス著、國森由美子訳（二〇一九）『オランダの文豪が見た大正の日本』作品社、三五〇頁（原著出版は一九二五年）。

(10) 松浦章（二〇一七）『汽船の時代と航路案内』清文堂、三六三頁。

(11) 橋爪紳也（二〇一五）『大京都モダニズム観光』芸術新聞社、二八五頁、橋爪紳也（二〇一四）『瀬戸内海モダニズム周遊』芸術新聞社、三九九頁。

(12) 谷沢明（二〇二〇）『日本の観光―昭和初期観光パンフレットに見る―』八坂書房、三〇九頁。

(13) こうした研究書以外にも、論文や報告書、学会発表などにおいて、近代日本の旅行史研究は積み重ねられている。それらを含めた研究の展望は、紙幅の関係もありここでは省略し、後日別稿でまとめたいと考えている。

(14) こうした視点から、明治期から昭和戦前期に出版された旅行案内書から五五点を選び、復刻出版した企画『シリーズ明治大正の旅行　旅行案内書集成』全二六巻（ゆまに書房、二〇一三～二〇一五年）の監修と解説をし、また近代日本における旅行案内書の系譜をつくる試みとして、荒山正彦（二〇一八）『近代日本の旅行案内書図録』創元社、二五四頁を上梓した。

(15) 『旅行日本』は、二〇二〇年に全号が復刻出版された。『東京ツーリスト倶楽部　旅行日本』全三巻、クレス出版。本稿は、復刻出版時に刊行された『『旅行日本』解説・総目次』（クレス出版、二〇二〇）に執筆した「解説」をもとに加筆したものである。

(16) 東京府第一中学校は現在の東京都立日比谷高等学校、設立された同好の会は後の博物学同士会である。

(17) 日本旅行文化会『旅』へと継承される、東京アルカウ会の会報誌は未確認であるが「探勝旅」というタイトルが付けられていた可能性がある。

(18) ジャパン・ツーリスト・ビューロー『ツーリスト』は、大正二（一九一三）年の創刊第一号から和文欄がなくなる直

前の昭和一一（一九三六）年六月号まで、現在復刻刊行が進行中である。公益財団法人日本交通公社総監修、荒山正彦監修『ジャパン・ツーリスト・ビューロー　ツーリスト　大正篇・昭和篇』ゆまに書房（二〇一七年～二〇二二年予定）。また日本旅行文化協会『旅』も、大正一三（一九二四）年の創刊第一号から昭和一八（一九四三）年八月の戦前期最終号まで、現在復刻刊行が進行中である。公益財団法人日本交通公社総監修、荒山正彦監修『日本旅行文化協会　旅』ゆまに書房（二〇二〇年～二〇二七年予定）。

(19) 財団法人日本交通公社編（一九七二）『日本交通公社七十年史』日本交通公社、二八＋九九三＋二〇〇頁。

(20) 『旅行満洲』と『観光朝鮮』も復刻出版がすすんでいる。『ジャパン・ツーリスト・ビューロー大連支部　旅行満洲』（不二出版、二〇一六年～二〇一九年）。『日本旅行協会朝鮮支部　観光朝鮮』クレス出版（二〇二〇年～二〇二一年予定）。

(21) 表1中の「料金」の空欄は、宣伝広告に記載がみられないものである。

(22) 一九二〇年代からはじまる「自動車旅行」「遊覧バス」に関する先行研究は少ない。今後の研究テーマのひとつであろう。

(23) 現代仮名遣いに改めた。